
が い か い の ち
崖 下 の 生 命

S G M

その不思議なお店に行ったのは、もうはるか昔のことだ。

あれは、大学二年生の夏休み。私はひとり瀬戸内海の島を巡る旅に出かけた。

瀬戸内海には大小あわせて三千ちかい島があるといわれ、有人島だけではなく、無人島や数メートルしかないような小さな島もある。

その島に行きついたのは、島巡りをはじめてから四日ほど経った頃だったと思う。島民が三百にも満たないような、小さな島だ。私は住宅がばらりばらりと立ち並んでいる地区を避け、なるべく人がいない山のほうへと歩いていった。草深き道なき道を掻き分けながら進んで行く。

それにしても暑い。

少し湿り気を帯びた地面からは、むっとする草いきれがこみ上げ、頭上から

は蝉せみの音が降り注ぎ、全身を汗がたらたら流れていく。

十五分ほど歩いたところで、急に視界がぱつとあけた。そこは、瀬戸内の大海原を一望できる、断崖絶壁であった。柵や手すりといった人工物はない。

足を滑らせば、一巻の終わりだ。

そんな辺鄙へんびなところに、そのお店はあった。それは断崖の近くにひっそりと、まるで人目を避けるように建っていた。私が来なければ、永遠に人に知られることはなかったのではないだろうか、そんな考えが脳裏かすを掠める。

その建物は不思議な形をしていた。建物の中ほどがやけに括くびれていて、数字の8にも見える。いや、もつと的確なものがある。それはまるで……。私は、おもむろにその不思議な建物に歩み寄って行った。

それは木造モルタルの二階家であった。おそらく海風によるものだと思うが、

ところどころ腐食^{ふしよく}しており、モルタルが剥落^{はくらく}していた。一瞬、廃屋かとも思つたけれど、建物の周囲の雑草などは丁寧^{ていねい}に刈り取られている。入口は木柱にガラス張りの両開き戸になっていて、無防備^{むぼうび}に開け放^あされている。中の様子は暗くてよく見えなかった。

私はゆっくりと扉のところ^{こゝ}に歩み寄り、頭だけを建物のなかに突っ込んで、目を凝^こらしてみる。冷やりとした空気が頬に触れる。思っていたよりも広めの室内には、簡易な木造の棚が無造作に立ち並んでいる。電灯などはなく、やけに暗い。天井近くに嵌^はめられた矩形^{くけい}のガラス窓から射す明かりだけが、唯一の光源であった。天使の階段のように射^さされた光のなかで、塵埃^{じんあい}が微かに反射しながら浮動している。

意を決し、入口の敷居^{また}を跨ぐ。

部屋の中は異様なほど寂^{しず}かだ。しかし、まったくの無音というわけではない。流れている。なにかが流れている音が微^{かす}かにする。そして夏だというのに、室内は体じゅうが粟^{あわだ}立つほど寒い。

次第^{しだい}に目が慣れてくると、室内の様子がさらに分かるようになってきた。天井や棚にはあちらこちらに蜘蛛^{くも}の巣が張っている。とくに天井に張った大きな蜘蛛の巣の中央には、巨大な蜘蛛が張りついている。やけに肢^{あし}が長く、黄色がかった気味の悪い蜘蛛だ。まるで、無垢な旅人を餌にでもしようとして待ち構えている怪物のようだ。

「いらっしやい」

ふと、背後から声をかけられ、心臓が止まるほど驚いた。振り向くと、老人が立っていた。異様なほど背が高く、痩せた老人だった。エプロンの

ような作業用の前掛けを着ている。

「あつ……すみません。勝手に入っちゃって」

「気にせんで。ここは店だ」

老人はそう言うと、私の脇を通り過ぎて、奥へと歩いていく。左手には大きな鑿のみのようなものを持っていた。老人が通り過ぎたあとには、灰ほのかに煙草の残り香が漂っていた。

「ここは、なんのお店なんですか？」

私は奥に消えていった老人に問いかけた。

「棚に置いているものが見えんかね」

私はそこではじめて棚に目を注いだ。薄うっすら埃ほこりが積もった棚には、砂時計が置かれていた。それも、夥おびただしいほどの砂時計だ。それは小指の先ほどの

小さなものもあれば、棚の横には私の身長と同じほどの大きなものまで。大小だけではない。すべての時計は技巧を凝らしていて、緻密な幾何学模様を彫っていたり、龍といった生き物を模していたりと様々であった。

「これは……すごいですね」

お世辞ではなく、本当にそう思った。息を呑む美しさとは、こういうことを言うのだらうと心から思った。建物に入ったときに聞こえていた流れる音は、砂時計の砂が流れている音だった。

「これは、ご老人が造られたんですか」

「ああ。全部な」

老人はそう言うと、奥のほうから出てきた。私のところまで寄って来ると、虫眼鏡を渡してきた。

「これで、私の手の平を覗いてごらん」

老人の言うとおりに、私は虫眼鏡で手の平を覗いてみた。老人の手の平には、砂時計が置かれていた。それは、虫眼鏡で分かるほどの、小さな小さな砂時計であつた。

「これは……。どうやって造つたんですか？」

「何度も失敗しながら、試行錯誤して造つたのだよ。半年はかかったね」

老人はにやりと笑う。

「でも、これで時間を計れるはかるんですか？」

「時間？そんなもの計らないさ」

老人はあつけらかんと言う。

「では、なにを？」

「うむ……」

老人は少し言葉に詰まる。そして、やや遠くに視線を遣りながら、

「生命いのちかな」

と言うと、得意げに笑うのであった。私は、この奇妙な老人の笑いに厭いやな感じは受けなかった。どちらかといえれば好感に近いものを抱いた。

「久しぶりのお客だ。いいものを見せてあげよう」

老人はそう言うと、つと踵きびすを返し入口に向かって歩いていく。私が立ちつくしているとき、

「はやく尾おいてきなさい」

私は老人の後を追った。

老人は店を出ると、建物の裏に回って断崖の端に立った。私も老人の横に

怖々と立つ。激しい潮風が顔を打ち、鼻孔をくすぐる。

「あれだよ」

老人は荒れる海を指さして言う。覗きこんでみると、切り立った絶壁に波がぶつかり、白く泡立っている。

私は息を呑んだ。

その海面の底に、巨大な砂時計が置いてあったからだ。それは、おそらく数十メートルはあったと思う。巨大すぎて、砂時計の上部は少し海面から浮き出ている。荒れ狂う波濤が砂時計にぶつかり、激しく飛沫を上げている。

「あれは……」

私は言葉を失った。

しばらく、その異様な景色を眺めていると、少し心が落ちついてきた。横目

にやると、老人は満足そうに煙草を吹かしている。

「わしが造つくったなかで、いちばん大きなものだ」

老人は言った。煙草の煙が風にあおられ、流れていく。

「これもひとりで造つくったんですか？」

「もちろんだ。何度も失敗したがね。これは完成までに三年もかかった」

私は老人の顔を横から見る。陽に焼けた顔には、深い皺しわが幾重いくえにも刻み込まれている。いったい幾いくつなのだろうか、少し疑問に思った。私はふたたび海に沈んだ砂時計に目を遣る。

「それにしても……あれで、いったい何を計はかるんですか？」

私は老人に問いかける。

「うむ……」

老人は、吸っていた煙草を地面に捨てて、火を躡にじり消しながら言った。
「生命いのちかな」